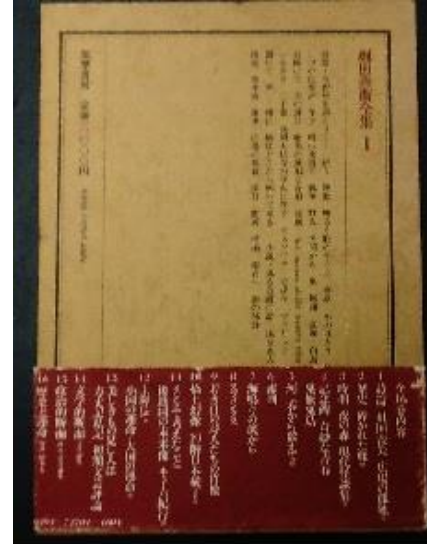


essais ころみ 2019年6月

(再掲) 2019年4月1日(月) 朝のうちは晴れ、新元号発表「令和」
『堀田善衛全集』見なおす試み

堀田善衛全集 (筑摩書房 1974年6月20日発刊開始)



2019年6月3日(月) 晴れ

今日はとりあえず晴れ。予報では週末は曇り・雨。ひよっとすると近畿も梅雨入りするかもしれない。当ビル前に少しだけ紫陽花の木がある。すっかり花が咲いて、今はまだ艶っぽさが無い。雨待ちの様子。

一 『堀田善衛』以外のことも(3) 一 「良質な意志」

ここにこうして仕事とは直接関係のないことを考え、書いているのは、今では性分としか言いようがない。人に勧められることなく、時代や社会を俯瞰するのも、また同じ。

日常生活で、街なかや電車内、その他もろもろの光景や出来事、ニュースや情報に接して、内心、今から世に出る年令でなくてよかったと思う。今の年令だからそう思えるのだろうけど。

これから世に出る年令だとしたら、今以上に「住む世界」を絞ることになると想像する。診断士の勉強で「20-80の原則」を知って、これはいろいろなことに当てはまると思った。

時代は変わっても変わらない層が20%はいるだろう。その時代ごとの世相をつくるのは80%の層。「ポピュリズム」、「データ資本主義」、「頭脳資本主義」が進んで、さて、人間はどうかわかるか。

これから20～30年後の価値観、思考様式、行動様式、倫理観、社会観、信頼の構造、などなど、それらの大勢を想像して、やはり20%の世界が居場所となるし、そうするはず。

そのためにも、ある種の諦観、前向きな諦めが大事。「令和」考案者がインタビューで、AI時代には良質な意志、生きる意志、さらに「悟り」が重要になると答えていた。本当にそう思う。

2019年6月7日（金） 雨

いよいよ近畿も梅雨入りか、今日は朝から雨。いつとき、強く降り、風は少々つめたい。雨がひどくなければ、散歩にはちょうどいいのだけど。

一 『堀田善衛全集』を見なおす(5) 一 もの語りの中へ

つい先日の日経に「まちライブラリー」の記事が載っていた。全国のケースを紹介していたが、ちょっと意外だったのは、大阪が一番多いこと。大阪人の人なつつこさが関係しているのか。

わたし自身は読書家とは思わないが、自問自答の助けに効くのはまずは、本。多くはないが、それなりに読んできた。そうしてきてよかったと、最近になって思う。

良質な情報以上に、悪質で偽りの情報のごくごく普通の社会生活に入りこみ、蔓延し、本質的価値があるのかわからないような商品で人の心を惑わす事業者も多い。

自分なりの価値観、直観をそなえないと、翻弄されて、我を見失うことになりかねない。場合によっては、うまく使われて、それに気づかず、結局は不利益を被る。ゲーム依存症は一つの典型かもしれない。

全集第一巻に収められている小説を仕事の合間にぼちぼち読む。ほんのわずかなページでも、頭の中に情景が描かれ、自分がその場にいるような気になる。作家の仕事というのは、やはり凄い。

読みながら、タイムスリップして、小説の登場人物たちをマジックミラーごしに観ているような感覚になる。進展を目を凝らして見つめ、状況を自分なりに感じ、思考がいろいろをめぐる。

この積み重ねが、たぶん自分ならでは知性、感性を養っていく。そうこうして直感的な善し悪しの判断につながり、その人なりの価値観や思考様式、行動様式の一端になる。

やはり子供の頃に読書に慣れ親しんだほうがいい。そのうち遠ざかっても、何かの時にはまた読書に戻り、我をとり戻すことができるのではないか。これまで以上に読書を勧めていこうと思う今日この頃。

2019年6月16日（日）

大阪大学中之島センター

友人の計らいで、国際シンポジウム「越境する言葉～詩人金時鐘の生誕90年と渡日70年を記念して～」に入場できた。基調講演、パネルディスカッション、浄瑠璃による詩の語り、詩人本人による朗読とスピーチ。3時間強、良質な時間をすごした。新しい視点、認識を新たにする点、多々。よい日曜となった。



ホールには長年のファンや親交の深い人たちが多数参加しているようで、そこかしこで挨拶が交わされていた。一番最後に登壇した「金時鐘」が語り出すと、今の世の流れについて、本質をつく鋭さ、大らかながら厳しさをそなえた話に、会場は静まりかえり、真摯な緊張感に包まれた。さすが…と、呻る。昨今では希少な場だろうと思う。



2019年6月17日（月） 晴⇄曇り

5月をとり戻したような気温。土日が妙な天気だった。土曜は予報に反してお昼は晴れ、夕方急に大粒の雨。風は強く、昨日も一日不安定だった。雨のおかげで空気がさわやか。それも今日明日のよう。

－『堀田善衛全集』を見なおす(6)－ 〈読まない〉うちに

原始から人間は進化してきたと思うが、それがまた原始に戻りつつあるのではないかと考え出して、しばらく経つ。最近それが目に見え始めていると考えている。

「そのうち電車の中で新聞を読んでいる人を見て、“あの新聞が読めるんだ…”と羨ましがられるようになると思いますよ」と時々話していたが、先日その現実が始まっているような話を聞いた。

ある子育て支援の施設でのこと。来館者のお役立ち情報として新聞の切り抜きが掲載されているが、ところどころ矢印がふつてある。これは何かを尋ねたら、読み方・読む先をよく聞かれるので、とのこと。

ひたひたと、そういう状況が巷に進んでいるのか。読書をする人、新聞を読む人は読む。読まない人はほとんど読まないという両極がどんどんと進んでいる。〈読まない〉うちに、〈読めない〉ようになる。

「読み書きそろばん」、「読む、書く、おぼえる、算じる、まとめる」の五知、いずれも一番に〈読む〉があるのは、学びの第一義だからだと思う。読むことは考えることでもあるから。

音読はできても読解はできない。英語の簡単な文章は読めるのは読めても、内容はハッキリとはわからない、と同じようなことが、ネイティブの日本語で起こりつつあるのではと想像する、大人の世界でも。

読書を重んじ、「堀田善衛」に出会わしてくれた大人たちに今あらためて感謝しなければ。おかげで、自分で考える習慣が身についた。少々なことでは惑わされない精神もそれなりにそなわった。

最近の口癖は、「みなさん、読書をしましょう。本業以外の本を読みましょう。大きな書店の店内散歩がお勧め、意外な発見があったりしますよ」。よければ、「堀田善衛」を読むのも一考です。

2019年6月24日(月) 晴⇄曇り

先週末から夕方に雨が降り、その後気温が下がるという日が続く。今朝もまだ涼しい風が吹く。22日夏至をむかえて、そろそろ蓮の花が気になるころだが、さて、近畿の梅雨入り宣言はいつのなるのか。

－京都FM 佐藤弘樹さん①－ 『タバコをやめましてね』

今週もまだ復帰されていないので、何か情報が載っていないかとネットを検索したトップに、「お別れ会はいつ？」の文字。

どうということ？と、京都FMのページを開いたら、6/17付の「大切なお知らせ」に、えっ?!。

すでに逝かされていたことを今朝知った。京都新聞の訃報記事には「肺ガンのため」と書いてあった。

今おもえば、これまでにないことが何度か続いていた。年初だっかか、急に番組を2日休んだり、4月には2週間の休暇をとったり。

印象に残っているのは、昨年の秋頃だったか、『タバコをやめましてね』。愛煙家であるのはよく知られていた。

へえー、何かきっかけがあったのかと想像するリスナーを見越して、『別に何かあったわけじゃないですけどね』。

そうなんだ…と聞き流していたが、次のセリフに何か違和感。『スタッフから、声が若返ったと言われて、ドキッとしましてね』。

ドキッとしたり・・・、その言葉にイマイチ合点がいかなかった。ご本人はそれなりの説明で話題を流していったが、こちらには？な想いが残った。

たぶんその時に本当のことを秘めていたから、微妙ながら辻褃のあっていない感じを、こちらが受けたのだらうと思う。

京都FMの開局は1991年、わたしの独立年と同じで、佐藤弘樹さんは開局からずっといた。

朝7時から、以前は11時まで、今は10時までの「アルファモーニング」を、聴ける時は毎朝聴いてきた。

感じ方、視点、考え方に共感することが多く、深い学びに、たくさんのかんことを教えてもらった。この機会にちょっとふりかえらうとしよう。

2019年6月27日（木） 雨

近畿も梅雨に入った。昨夜から降ったりやんだり。今日はすっかり雨、むし暑い。長期予報では昨年ほどの酷暑にはならない模様。G20開催の大阪、今日から交通規制、今朝の電車は少し人が多かった。

—京都FM 佐藤弘樹さん②— 「響存」

佐藤さんの代わりに別の方が担当してからは番組をほとんど聴いていなかった。6月17日に番組内で急逝が公表されたのも知らず、21日に復帰を待ってますとハガキを送っていた。局側は戸惑ったことだらう。

佐藤さんにはたくさんのかんことを教えてもらった。興味、関心の向きが似ていると勝手ながら感じていた。これまで何度メモしたことか。

「感じるけど、考えない人たちがいる」という話は興味深かった。「感想と思考の区別つかない若い人たちがいる」というのだった。「イヤと感じるけど、でもそのことをよく考えて、イヤでもやらなければいけないと判断する」。そういったプロセスを辿らない人たちを憂っていた。

これがもう10年ほど前のことだから、そういう人もかなりのボリュームになっている感。便利すぎる世の中に慣れて、「面倒」と感じるのが広範囲になり、〈友だち〉なら相手の耳の痛いことも言うのが〈友だち〉関係のはずだが、〈知り合い〉ほどの無難な付き合い。

コミュニケーションと「感応、響存と訳した方が合っている」と言われた時には、なるほど…。仕事でさかんにコミュニケーションの概念について話しているの、以来「響存」をよく引用させてもらっている。

自分の想いや考えを他者に伝えて、相手方に響いて、残り、それがフィードバックされて、伝えた側に響いて、残る。そういう意味に捉えた。たしかにコミュニケーションの意義をよく表していると感じた。

62才で逝ってしまっ、ご本人にはやり残したこととして何を想っていたらう。あるいは、それなりにやった…とふり返りながら、旅立ったらうか。番組をとおして知る限り、『晩年のスタイル』をある程度決めていたと想像する。思い出はつきない

2019年6月28日（金） 曇り

G20の交通規制で今朝の地下鉄車内もいつもより人が多かつた。昼前に三番街へ行ったら、タクシーの列は消えていた。土曜開講中の創業塾も日程から29日は外されていた。明日あさってはじっとしていよう。

—京都FM 佐藤弘樹さん③— 「まだ一度も沖縄には…」

このところ朝はFMではなくCDを聴いている。当然だけど、佐藤さんと同じようには誰もできない。佐藤さんに親しんでいた者としては、今のラジオ番組に、どうしても聴きたい他の番組がない。FMccolo日曜夕方の方の「ラジオシャングリラ」ぐらい。

佐藤さんとすれ違ったことが一度だけある。京都商工会議主催のトークイベントのコーディネーターが佐藤さんだった。京都商議の会員でもあったので、すぐに参加を申し込み、満員の会場に交じた。

イベントが終わり通路から会場を出る佐藤さんと目が合った。声をかけようと思ったが、誰かと親し気に言葉を交わしているのを見て、そのままやり過ぎた。何か言いたげな表情はしていたので、佐藤さんも一瞬間を持ってくれた感じはあったが。

惜しい気はしたけど、大阪と京都、また何かで会える機会もあるだらうと、その時は思った。ほぼ毎朝、番組で声を聴いていたし、話を内容をわたしなりにまた考えて、対話しているようなものだった。

これまでで一番、印象に残っているのは、沖縄のこと。もう10年も前だったか、ラジオのむこうから、「わたしはまだ沖縄に一度に行っていないんですよ」。へえー、わたしと同じだ…。

そして次いで出た言葉に、ビックリ。「沖縄には遊びでは行けない気がして…」。

まったく同じだった。これを聴いた瞬間、“やっぱり、同じようなアンテナのはり方だ、佐藤さんとは…”。これまで以上に親近感をおぼえ、別な環境にいるけど、〈住む世界〉は同じだと感じた。

これからもっといろいろな考えを聴きたかった。年を重ねて、さらに磨きがかかっていく精神性に触れたかった、共にしたかった。

17日の公表から一週間も経って訃報を知ったが、実は17日の早朝に夢のはずなのだけど、番組に復帰した、実に生々しい佐藤さんの声を聴いた。目がさめて、すぐに手帳にも書き留めた。

この時、どちらかだと思った。本当に復帰するか、この世の人でなくなるか。実際はすでにこの世の人ではなかった。最後の最期、あの世への道すがら、寄ってもらって、感謝しています。

